

キンメダイの資源回復に向けた 種苗生産技術の開発

(予算区分 外部資金 研究期間 2022 年度～)
担当：水産・海洋技術研究所 伊豆分場 伊藤結花
深層水科 稲葉晃誠

【研究の背景とねらい】

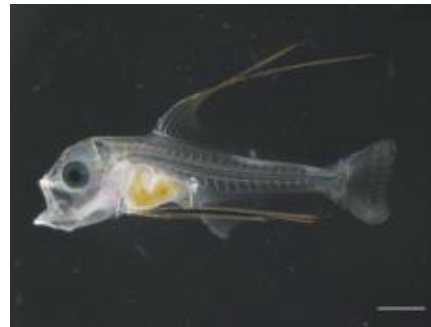
- ・本県のキンメダイ水揚量は最盛期の 7 千トンに対し、2022 年には 1,183 トンまで減少しています。
- ・漁業者は資源回復に向けて自主的な資源管理に取り組んでおり、種苗放流の実現に期待が寄せられています。
- ・県は第 8 次栽培漁業基本計画（2023 年～）の研究対象魚種と位置付けており、研究の第一段階として種苗生産技術の開発を目指します。

【これまでに得られた成果】

- ・麻酔の活用等により、天然親魚を活かしたまま持ち帰ることが可能になりました。
- ・開発した精子の冷蔵保存技術（筑波大学との共同研究）により、人工授精の作業が効率化され、安定的に受精卵を得られるようになりました。
- ・受精卵の温度管理は、受精は 10℃、卵管理は 15～20℃、ふ化は 20℃、仔魚の飼育は 20～25℃が適していることがわかりました。
- ・深層水を使用して長期養成した親魚にホルモン投与を行ったところ、雌の卵巣の発達と雄の排精を促すことができました。
- ・夜間操業調査にて 22 時台に釣獲された親魚から、良質の受精卵が得られました。この受精卵からふ化した仔魚を大学の飼育施設で飼育したところ、最長で 33 日間の生存を確認し、過去の記録（20 日間）を更新しました（東京海洋大学との共同研究）。



採卵用に確保した親魚



33 日齢の仔魚

【期待される効果】

- ・栽培漁業の推進によって、積極的な資源回復の取り組みが可能になります。
- ・飼育試験で得られた知見は、キンメダイの初期生態の解明への貢献が期待されます。

【今後の計画】

- ・良質卵を得るための親魚捕獲方法を再検討し、安定的な受精卵の確保を目指します。
- ・ホルモン投与や水温刺激による人為催熟を試み、長期飼育した親魚から受精卵を得ることで、天然資源に頼らない種苗生産を目指します。
- ・ふ化後の仔魚飼育において、初期餌料や給餌方法を検討するとともに、飼育環境の最適化を図り、生残率の向上と長期間の飼育を目指します。

(作成 2025 年 4 月)